鹿児島県立鹿児島中央高等学校　～自主 好学 敬愛～
進路指導室だより 11月号
発行:進路指導部企画運営係<令和8年11月19日>

「精神的に向上心のないものは、馬鹿だ」　のお話

ご存じ「夏目漱石(こころ)」での、若かりし「先生」がKに言い放った一言ですよね。

私の経験からして、この教材を扱う時期は２年生の調度この頃。本校もそうですが、国内体験学習を数週間後に控えた時期で、自主研修やディズニーランドへそれぞれの思いを馳せ、学習に身の入りにくい時期でもあります。授業で「こころ」扱う時、この場面で使う鉄板のネタが私にありますので、暫くお付き合い下さい。

「諸君！世間はこの時期から少しずつクリスマスに向け、街のあらゆる色が変わり始める。その最たる象徴がアミュプラザのクリスマスイルミネーションだ。そしてにわかカップルと呼ばれる人々が、まるでゾンビのようにその光に吸い寄せられる。加えて修学旅行という高校生活最大の行事まで後に控えているのだから、ここでカップルにならないと出遅れてしまう気になるのも無理はない。しかしながらその幸運？が自分に舞い降りてくれるとは限らない。シングルベルになることだって充分にある。そんな時はカップルに向かってそっと心の中で呟くのだ『精神的に向上心のないものは、馬鹿だ』と、これは決して負け惜しみなんかじゃないことは……」

閑話休題。私の好きな「内田樹」の文章を紹介します。各階のフロアーには、読書紹介のツリーも飾られていますよね。こちらにもきっと素晴らしい出会いが待っているはずです。　以下引用



目からウロコの愛の心得

世間はクリスマスである。

娘がはやばやと東京へ去り、合気道の納会も、すす払いも終了し、美しく静まりかえった家で、お仕事三昧、読書三昧、音楽三昧、美食三昧の日々である。

昔はクリスマスには女の子とデートをしていた。

私はそういうときにはちゃんとしたレストランで食事をして、それなりのプレゼントを差し上げて、タクシーでおうちまで送るという、女の子からすれば「たいへん好都合な男」であった。

そのせいか、私は若いころ、けっこうもてた。

それも当然である。ご飯を奢ってくれて、プレゼントも貢いでくれて、呼べば飛んできて、ほっておいても怒らない、別れてもあとくされがないんだから。女の子にしてみれば理想的に「好都合な男」なんだもの。これでもてないはずがない。

しかし、このように達観するまでにはいろいろと苦難もあったのである。高校生のころまでは「とにかくしつこくつきまとう」のが愛情表現だと思っていた。しかし、どういうわけか、しつこくつきまとって好きだ好きだ好きだとわめきちらすと、すべての女の子は走って逃げてしまうのである。

これはまずい。こういうときに発想の切り替えが早いのが私の取り柄である。私は問いを反転したのである。どのようなガールフレンドを私は理想としているのか？

都合のいいときにはいつでも遊びに来てくれるが、私の行状には好意的無関心を維持し、こまめにプレゼントをくれて、私が「別れよう」と言ったら黙って身を引いてくれて、別れたあとにもにこにこと友達づきあいしてくれる女の子……それこそ、私が求める理想のガールフレンドであることは贅言を要さない。

なんだ、それを逆にすればいいんじゃないか。

私は目からウロコが落ちた。こちらがしてほしいことをそっくり相手にしてあげればよいのである。

私が二十歳くらいのときにエリック・シーガルという人の『ラブ・ストーリー』という恋愛小説とその映画化（『ある愛の詩』）が大ヒットしたことがあった。そのときの宣伝コピーがLove is not to say sorry. というものであった。

これを配給会社は「愛とは後悔しないこと」と訳したが、これはちょっと訳語として不適切である。

「愛とは後悔しないこと」では、「とにかく後先考えずに情熱に身を任せて突っ走れ」というふうに誰でも理解するだろう。

しかし、物語の中での意味はそうではない。

この台詞は、身分違いの娘と結婚した息子を勘当にした父親が、夭逝したその娘の葬儀のときに数年ぶりに会った息子にI'm sorry（「すまないことをした」）と悔いの言葉を告げるのに対して、息子が冷たく返す言葉なのである。「もし、あなたが私を愛していたのであれば、あとになってから『すまない』などと言うような行為をするはずがない。つまり、あなたは息子である私を昔も今も愛してなどいないのである」という、これは「絶縁の言葉」なのである。「愛」というのは、あとで「すまない」と言わねばならないような仕儀に立ち入らないように、一瞬たりとも気を緩めないほどに張り詰めた対人関係のことである、ということをわたしはこのとき学んで、「おおお」と目から二枚目のウロコを落としたのである。

「自分にとっては快楽であるが、相手にとっては迷惑なこと」を選択的に相手に向かってするばかりか、その迷惑に相手が耐えることを「愛の証」だと信じている人がいる。



それは話が逆である。

「愛する」というのは「相手の努力で私が快適になる」ような人間関係ではなく、「私の努力で相手が快適になる」ような人間関係を築くことなのである。

それ以外のどのような人間関係も「愛」という言葉には値しない。私はそう思う。　内田　樹

チャンスは準備された心に降り立つ　　１年

皆さんは「**カイロス**」という神様を知っていますか？

カイロスは、古代ギリシア神話に登場する「チャンス」や「好機」を象徴する神様です。カイロスの姿には、少し変わった特徴があります。**前髪は長く、後頭部には髪がありません。また、足には翼がついている姿**で描かれることもあります。（著作権の関係で掲載できないので自分で調べてみてください。）

これは、チャンスというものの性質を表しているといわれています。チャンスがやって来たときには、前髪をつかむことができます。しかし、一度通り過ぎてしまうと、後ろには髪がないため、つかむことができません。つまり、**チャンスは訪れたその瞬間に行動しなければ、逃してしまう**ということです。

では、チャンスをつかむためには、どうすればよいのでしょうか。

ここで紹介したいのが、フランスの科学者ルイ・パスツールの言葉です。

「チャンスは準備された心に降り立つ」（原文の直訳は「チャンスは準備された心にのみ宿る」）

校長先生の講話でも話題に取り上げられたことがありましたね。

パスツールは、微生物の研究などで大きな業績を残した科学者です。彼は 1854 年、フランスのリール大学での講演で、「観察の分野では、偶然は準備された心にしか味方しない」という趣旨の言葉を残しました。

パスツールの研究に、発酵に関するものがあります。酒造業者から発酵がうまくいかないという相談を受けた彼は、工場で起きている現象を顕微鏡で詳しく観察し、実験を重ねました。その中で、正常な発酵と異常な発酵（腐敗など）では、関与している微生物に違いがあることに気づきました。

それまでは、化学反応の狂い、すなわちイレギュラーが発生することで異常な発酵になると考えられていたのですが、彼は何気ない観察からこの発見をしました。しかし、その違いに気づき、意味を見いだすことができたのは、日頃から研究を積み重ね、物事を注意深く観察する準備ができていたからだと本人も語っています。

つまり、**偶然の出来事そのものが大切なのではありません。その出来事に気づき、考え、自分の知識や経験と結びつける力が大切**なのです。

この二つの話は、私たちの高校生活にも通じるものがあります。

例えば、**授業で先生が話した何気ない一言が、将来の夢を見つけるきっかけになるかもしれません。部活動での経験が、自分の新たな可能性に気づくきっかけになるかもしれません。また、進路について調べているときに、思いもよらなかった大学や学問、職業に興味を持つこともあるでしょう。**

しかし、そうしたチャンスは、ただ待っているだけでは生かすことができません。

日頃から授業に真剣に取り組むこと。苦手なことにも挑戦すること。さまざまな人の話を聞くこと。自分の興味や関心を広げること。こうした一つ一つの積み重ねが、チャンスをつかむための準備になります。

高校１年生の皆さん。今はまだ将来の夢や目標がはっきりと決まっていない人もいるでしょう。それでも大丈夫です。今すぐ答えを出す必要はありません。

ただし、いつか訪れるチャンスを逃さないために、今できる準備を始めてほしいと思います。

チャンスが来てから準備するのではなく、チャンスが来たときにつかめる自分でいること。

高校生活の 3 年間は、自分の可能性を広げるための大切な時間です。毎日の小さな努力や経験を大切にしながら、未来のチャンスをつかめる自分をつくっていきましょう。

未来のチャンスは、今日の自分がつくる。いつか来るその一瞬のために、今できる準備を。